

Title	慶應義塾図書館蔵「隠れ里」 解題・翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2003
Jtitle	三田國文 No.37 (2003. 3) ,p.31- 34
JaLC DOI	10.14991/002.20030300-0031
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20030300-0031">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20030300-0031</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 慶應義塾図書館蔵「隠れ里」解題・翻刻

石川 透

## 解題

室町物語「隠れ里」は、異類の合戦譚である。東京大学国文学研究室蔵奈良絵本が、「室町時代物語集」第五（一九四二年）等に翻刻されている。慶應義塾図書館蔵本は、「室町時代物語集」第五の解題に、「幸田成友博士蔵」として紹介されている絵巻のことである。

本絵巻は、詞書部七段、挿絵部六図からなる。詞書部は、東京大学国文学研究室蔵本と較べると、相当に欠落していることがわかる。挿絵も一図の中でも切断された部分のみられ、おそらくは全体のうちの何図かは、脱落しているであろう。

本絵巻は、江戸時代前期の特徴的な絵巻のかたちを備えている。書誌は後に記すが、本としての大きさや、字高、下絵入り斐紙に整然と記された詞書、挿絵の構図や描き方などは、いづれも類例が他にみられる。

詞書きについては、もちろん、奥書などはないが、国文学研究資料館蔵「羅生門」等はその署名がみられる、朝倉重賢の筆跡に近似している。私の整理では、朝倉重賢の書写絵巻のうち

でも、その初期に写したものであろうと推測している。なお、これらの奈良絵本・絵巻の問題については、二〇〇三年に三弥井書店から、研究書を出版する予定である。

「隠れ里」は、昔話等にもある隠れ里がテーマであるが、内容的には、恵比寿と大黒の合戦の話や宴会に趣向がある物語である。全体の概要は、以下の通りである。

木幡の野辺の東で、大きな穴からものいう声が聞こえた。忍び込んでみると、鼠達が働いている。その様子を見ると、早馬がやってきて、摂津の西宮において恵比寿のものを盗んだことから、恵比寿と比叡山の黒天の争いになり、この隠れ里の鼠にも、大黒天から加勢の要請が出たという。いざ、合戦となったが布袋和尚が仲裁に入り、和睦の宴会となり、相撲をとった。ふと、目覚めるとこれは夢であった。

なお、同題の別本も存在するが、基本的には本書の伝本は少ない。

以下に、本絵巻の書誌を記す。

所蔵、慶應義塾図書館

番号、一三二X・七七

形態、絵巻、一軸（残巻）

時代、「江戸前期」写

寸法、三一・二種

表紙、後補金繡裂表紙

外題、なし

内題、なし

料紙、金切れ箔、模様入り斐紙

字高、二六・二種

挿絵、計六図

備考、箱書きに「鼠のさうし」とする。

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「」括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかつた。なお、前後が欠けている場合は（欠）と記し、部分的に紙が剝がれている所は、□を補った。

### 〔隠れ里〕

（欠）におふこよひは、秋もなかは、夜もなかは、新月の色、まにててらして、二千里の外まで、くまもなし。古人の心も、きかまほしとおもふより、よもきか戸ほそを立いて、そこともしらす、たとり行、宮このひかし、かものかはらにさしかかり、水のなかれ、いとふかきを、こしなかまくりあけて、小夜こと

に、音をのみなく、千鳥あしになり、やうく、打わたりて、みなみをさしてゆくほとに、かの大仏や、三十三けんを、ゆんてに見なして、打過るほとに、一二のはし、ほうしやうし、紅葉いろこきいなりやま、松にかゝれる藤のもり、小はたの野へに出たりけり。

ひかしのかたに、ものいふこゑ聞えたり。我ならて、又よの人も、月にはあこかれて、こゝらたとるらん。うちよいて、「こよひをなかむる歌あらは」と、口すさひて、立よりけれとも、人なし。かしこなるさしかけのころを、見やりたれば、いとおほきなるあなあり。そのうちにこそ、人の（欠）

### 〔挿絵・第一図〕

（欠）にしのかたにまはりてみれば、おりふし、中門はひらきてあり。内を見入たれば、すいしやうのいきこをしき、めなうの石をならへたり。つりととの、わたり殿、玉のらんかんに、こかねをこしりとし、白かねのはしら、めなうのぬき、さんこのうつはり、こはくのむなき、すいしやうのみすに、真珠のようらくをかけたたり。六間の会所には、大ものたゝみをしき、三ふく一対、くわひん、かうろ、みかきたてゝならへたり。書院には、もろこし、やまと、ものゝ本のまきたるもあり。とちたるも有。めんさうには、ちんのまくら、からにしきのとのおををきたり。そのかたはらには、七ほうのきよくろくに、へう、とらのかわをしきかけたたり。せんすいには、伊勢しま、さいかの大石をあつめて、つくりあけ（欠）

### 〔挿絵・第二図〕

かゝりけるところに、はやうち馬にのりて、かけきたり、あ

んないをこふ。うちより立出て、そうしやのまにて、ものいふ。「なになるらん」と、聞ぬたれば、この津のくに、にしの宮にすむねすみ、えひすとのゝもり物を、ぬすみとる。御まへなるこまいぬ、これを見て、おほきにいきり、ほえければ、ちいさきぬすみのことなれば、おそれまといひて、にけゝるところに、ふるきゐるものと、おちいり、やう／＼／＼／＼／＼／＼をつたひて、ぬれ／＼として、はひあかり、わかすむふるすに立かへり、父母に、かこちてなきさけふ。

「いかなるゆへそ」とたづぬれば、「にしの宮のはいてんのあたり、こゝかしこをあそひけるに、こまいぬのかけ出て、せなかをしたゝかにかみたり」といふ。

ぬすみのおや、このよしを聞いて、「おとなげなくも、こまいぬとの、たとひ、いかなる事ありとも、あれほとちいさきぬすみを、なさげなくも、かませ給ふこそ、やすからぬ。そのきならば、にしの宮のしやたんをかふりたふし、鳥居の二はしら、うちころはかせ」と、いかりければ、わかきぬすみとも二三百、はしり出て、ひそかに、にしの宮にしのひよりて、しやたんの戸ひら、鳥ゐのはしらをかふる事、いふはかりなし。

えひすとの、このよしを聞きしめし、「にくきやつはらかしわさかな。そのぬすみとも、一ひきもにかすな。地こくおとし、さけわなにかけて、こくおとし、さらし、とひ、からすに、くらはすへし」と、いかり給ふ。

こまいぬ、うけ給はり、ひらた舟を、地こくおとしにしたらひ、ゑひす殿のもとめをかせ給へる、つりはりの糸ともを、わなにこしらへて、こゝかしこにかけをき、うしろのかたしり、

時のこゑをとつとあくれば、二三百のわかぬすみ、きもをつぶし、にけふためきて、地こくおとしにかけこみて、をしつふさるゝもあり、さけわなにかゝりて、ちうにふらりとなるもあり、手をおられ、あしをそこなひ、こしをうちおり、さま／＼、かたわに成て、にけかへるもの、わつかに(欠)

#### 〔挿絵・第三図〕

こまいぬ、いそぎ御前をたちて、にしの宮にはせかへり、えひすとのに、かくと申ければ、えひす、おほせけるは、「かのぬすみと申は、大日きやうの六十心に、はえしんととかれて、物を心ふる人をは、ぬすみの心にたとへられたり。首鼠両端といふは、前漢書にしろすところ、うたかひおほきを名づけたり。されは、礼記に、ねこをやしなふ事は、ぬすみをとらしめんため也といへり。かゝるいたつらものを、手ま□□□□で、ししやとし、あまつさへ、さやうの□□せましきと、おほせあるこそ心えね。又、つれ／＼草にも、なくてもよからんもの、くにゝぬす人、家にぬすみといふなれば、わさはひのものといふは、此ものにきはまれり。されは、かゝらんことはをきくからは、たゝ、もとの茶うす、ひき木をかへし給はらんと、かさねて人をつかはし給ふへし」と、いからせ給ふ。

こまいぬ、かさねて、ひえいさんにいたりて、かくと申ければ、大こく、おほきにはら立給ふ(欠)

#### 〔挿絵・第四図〕

(欠)なり。せうまうのわさはひなんとは、ぬすみより、なをなくともよからん。天地は、さはなきもの也。えらまぬをみちとする、いはんや、物にはとりへあり。せうまうのゆくにも、

あかきをとりにするとかや。あしからんねすみにも、そのとく、とりえのあるゆへに、十二支のそのなかに、子の一支をいれられ、正月のいはひにも、子曰の松をぞ、しやうくはんする。四方のうち、北をねのかたとなつて、水をやういくせしむる也。やくし十二神のうち、ひきやら大將は、かしらにねすみをいたゞきて、子のときをまもり給ふ。十一月のねまつりも、ふつきをねかふに、りしやうあるゆへそかし。このことはりをしらせ給はぬゆへ、さやうにの給ふおかしさよ。たとへは、日ころ申たんする中なれば、あしからんことをも、かんにんし給ひてこそ、道とはいふへけれ。此うへは、それかしか手のものに、ゆひをなりとも、さし給はゞ、御うらみ申へし。そのうへ、茶うす、ひき木をも、かたくまとひ申まし」と、あらゝかにのたまへは、こまいぬ、(欠)

〔挿絵・第五図〕

(欠) めし、心のまゝに、たからものを打いたす。もろくのしゆしやうのねかひをかなへ、心にしたかふいはれあり。えひす殿とむまれて、三つのとしまて、あしもたゞす、ほねもなし。ひる子のみことゝ申せしは、このゆへと聞えたり。父母、これをにくみて、あまのいはくす舟にのせて、大かになかしすて給ふを、りう神、是をあはれみて、とりあけてやしなふに、やうく人とならせ給ひ、にしの宮にまし、しよこくのあき人の、うはまいをもらうて、月日をゞくり給ふなり。風すさましく、浪あらきはまへの岩にさをしめて、うほをつりて、日をゞくり、身をすくるわさをなすに、うちよりそたちと云事あり。今その身にて、なにのけいつのいるへきと申も、なをいやまし

也。たゞとにかくに、かうさんし給へ。それ、さなきものならば、御うんのすゑにてあるへし」と申あけて、あなすみは、(欠)

〔挿絵・第六図〕

かゝりけるところに、もろこしのほていくはしやうは、みろくほさつのしけんとして、せんぼうのそしなり。日本にわたり、やまとのくに、かた岡のたるまじに、さんけいし、そのつゐてに、みやこの□□をも、一けんせはやとおほしめして、木津河をうちわたり、国三つをさしこえて、ふしみ、こわた、藤のもり、みちなればとて、まつ、とうふくしをけんふつし給ふ。むかし、しやう一こくし、もろこしのきん山しをうつして、日本にわたし給ふ。つう天のはしうちわたり、きたのものに立いて、いなり山をめてに見て、法しやうし、一二のはし、大仏、三十三間、うちすき、五てうのはしをわたらんとせしか、まつ、なんせんしにまいらはやとおほしめし、きたをさしてあゆみ給ふところにて、宮このうち、三てうわたり、むまけ□□おひたゞしくみえたり。人にたつ□□まへは、「しかくの事」とこたふ。ほて□□こしめし、「かのえひす大こくは、□□□(欠)